

広島俳句倶楽部

令和三年四月作品集

里の春

あざみ

春は鳥の声や彼岸桜をはじめとした花々が咲き、里は桃色の霞がかかったように華やかになります。家の裏にはチエンソーや耕耘機の音が響き、人声も聞こえ、息に賑やかになります。穂やかな日に、しばらく切株に座って桃の花を眺めていますと、ふと、細見綾子先生のふだん着でふだんの心桃の花

が浮かびます。今、この美しさを世話する人が高齢化し、また、猪などの獣が荒らし、残すのが難しくなっています。四季折々の風物でいろんな感動をもらい、何げないことも、私にとっては大切な俳句の素材です。籠りがちな今、里山の移り変わりを俳句に詠めるのは、ほんとうに幸せです。この里山の自然環境をなんとか維持できないだろうかと思っています。

どの部屋も朝日の入りて梅匂ふ

杖をつく人の多くて梅の花

傘並び手のひらほどの春子なり

四方より花桃の風家に吹く

一夜漬の芥子菜香る朝の飯

杭を打つ音の響けり犬ふぐり

春の蚊の井戸の縁より出てにけり

スイートピー替へたる水に映りをり

日もすがら無言で畑を打ちにけり

初音聞く夕餉仕度の手を止めて

《作品鑑賞》

村上正人

あざみさんは、お住まい近くの里山を普段から作品に詠まれている。このたびの「里の春」は、その里山を守りたいという思いを寄せて作品にされた。

どの部屋も朝日の入りて梅匂ふ

部屋に入る日差と梅の香がまだ肌寒い朝に清々しい。

四方より花桃の風家に吹く

桃は災いを除き、福を招くと言い伝えられ、花桃の風が吹くだけでも心地よいものであるが、それが四方からというのは、ほんとうに羨ましい限りである。

日もすがら無言で畑を打ちにけり

家の裏手の畑であろるか。一日畑の土を掘り起こし、植え付けの準備をしている。「無言で」というのがいかにも畑打ちらしい作業光景である。

鳥のはなし

栄吉

専門家によれば、広島市は多くの鳥を見ることができるところで、私の住む町は、中でも条件に恵まれたところであるらしい。確かに色々な鳥を見ることができ、適度な距離をとれば、一緒に歩くこともできる。そんな町にいても、情けないことに、鳥の識別が得意な名前が覚えられない。頑張っているが、忘れる方が早い。溜息をついたら、窓を鳥の影が違った。

山裾を即かず離れず鵜かな

山寺や厠の窓に柿ひとつ

幼子の声に癸ちたる鵜鵜

見上ぐれば見下ろしてくる冬鵜

バス停に馴染みの鳥や霜柱

手袋の煽られてゐる枝の先

咳やルーペで覗く工芸展

鷹飛べば刹那静まる河川敷

囀の雨音凌ぐ朝かな

景桜の蔭広がりにて乳母車

《作品鑑賞》

村上正人

栄吉さんは、作品の中にあまり鳥を詠まねなかったようだが、このたびの「鳥のはなし」では、鵜や鵜鵜のような小鳥から、鵜として猛禽の鷹まで登場する。その鳥らしさと栄吉さんならではのウィットに満ちた視点がそれぞれの句に感じられる。

山裾を即かず離れず鵜かな

里近くに現れる鵜の特徴を「山裾を即かず離れず」と表現しているのはとても面白い。

見上ぐれば見下ろしてくる冬鵜

海上を走行する船上では、視線の上を近づくでもなく離れるでもなく漂うように飛ぶ鵜がいる。こちらが見上げると向うも見下ろしているように感じる。鵜と作者の関係が目に浮かぶようである。

鷹飛べば刹那静まる河川敷

何かと人には迷惑がられる鷹も、天敵の鷹が飛ぶと蜘蛛の子を散らすようにいなくなる。河川敷に鷹匠が鷹を放つことで、それまでの鷹の喧騒がなくなる瞬間を「刹那静まる」と表現されているのだろう。

雲すこし増えしと思ふ斑雪かな

主峰から雲流れくる雪残り

雪残るその家に入集まりぬ

紅梅に風向きのやや変はりたる

四つほど梅を通つてゆく雲か

今夜には雨の降りだす雛飾

いつも見る椿すつかり暮れてをり

もの深く思うて通る芽吹かな

花種を蒔く人のある岸辺かな

雨の音するばかりなり燕飛び

入り彼岸明るき部屋に写経して

夕空に鶯の高舞ふ弥生かな

春驟雨川面を叩く音静か

春愁やいつもの坂に雨匂ひ

下校子の触れてゆきたり雪柳

濠端を歩けば降りて春落景

はくれんの散りたるを掃く夕べかな

エンジンを止めて鶯鳴くを待つ

門灯に照らされてゐる桜かな

早朝の牡丹を剪りて活けにけり

豊後梅いそがしさうに鳥移る

鳥の来て薄紅梅のすこし散り

散る梅も咲く梅も見えて歩きたる

一輪の残れる梅の香りけり

初蝶の吾に寄り来て離れけり

山裾を歩いて行けば初音して

その村の家々に咲き梅の花

谷川に雨降りつづく野梅かな

ひとときを歩いて巡る桜かな

薔薇の芽のひとつひとつに日の差せる

佐保光俊

村上正人

高尾ひとみ

ローカル線の警笛響く春の山

二筋の工場の煙春の昼

山壁にぼつぼつと花辛夷

つばくらめ中洲を越えて飛びにけり

薯植うる母と背中に風を受け

黒牛を放す山裾山つづ

小流れの水音近く麦青む

麦青む川は大きく蛇行して

細波を跳び越えてゆく水馬

石楠花にしばし見惚れて友の家

秋沙

海沿の軒に並べて鰯干す

人力車桜の下で待つてをり

たんぼの絮を飛ばして姉妹

山裾に一族の墓花咲いて

切株に座して見上ぐる山の藤

休んではまた歩きだす藤の道

藤棚の房長くして花盛り

著莪の咲く坂に一息入れにけり

朝顔の苗植ゑてゐる裏の庭

傘さして緋牡丹に近づいてゆく

あざみ

三月やゆつくり変はる紙芝居

先生と最後の連弾春休み

卒業の黒のバンプス揃ひ立つ

春水に足洗めては驚歩む

日の差せる松に来てゐる春鴉

桐の芽をつまむとして手を伸ばす

ステーキを分厚く切りて春の星

父と子の数学を解く春の月

風光るスケートボード蹴りながら

夏近しぐんぐん上がるエレベーター

亜矢

窓を開け日の差す梅を見てゐる

沈丁の傘の内へと香りけり

黄水仙北を向きたる二三輪

岨道にわづかに草の萌えてをり

鶯の声さまざまに藪の中

初蝶の岩場にとまり飛び去りぬ

山桜岩場に妻と座りけり

布団干す庭に連翹揺れてをり

陽春の池の小橋を渡りたる

春昼や小岩に亀の重なりて

剪定の切り口にある生氣かな

足止めて見送つてゐるしやばん玉

盛り上がり花壇に垂れて芝桜

幼子の座り込みたる芝桜

陽炎やトランペットの音響く

陽炎や湖岸に古き石灯籠

陽炎や鍛へし身体走り行く

祠掃く線路に沿うて黄水仙

春の海臨時ダイヤの列車ゆく

春暑し仔犬のはしやぐ水辺かな

椅子に桶かさね二月の仕舞風呂

花あしび錠のされたる薬草園

初蝶の飛びたるを目で追ひにけり

堀越しの一つを拾ふ落椿

花屑の吹き溜りたる山の道

石垣に萼の花のびつしりと

雨上り種芋植うる畝高き

係舟の綱のたるみてかげろへる

青空の深きに辛夷咲き満つる

ほとばしる寛の水や著莪の花

井藤希

栄吉

大橋博子

畦焼の煙バスへと流れたる

山寺の馬酔木咲く礎のぼりけり

まだ匂ふ花殻を抜く春の宵

海見ゆる木椅子に座り夕長し

夕暮の花に聴きたるコンサート

夕星へふらこの揺れ続きをり

囀や木立の中の美術館

山峡の朝霧晴れて残る花

今もなほ使ふ井戸水山桜

山羊の鳴き牛の鳴きたる花の雨

暁子

農道の振幅されて土筆摘む

札所寺下りて櫓の花を見る

うぶすなの土手一面に梅の花

錦川淵に白梅映りたる

ドア開き春めく街の風入りぬ

バス停にリュックを背負ひ春の雨

菜の花の土手に車を降りし人

ボート漕ぎしぶきのかかる花筏

春光を額に受ける日向かな

竹藪の途切れしところ踊子草

新庄憲彦

石垣の上に咲かせて水仙花

鶯の声のかすかに遠くより

鶯の声短けれ背戸の山

草花を植ゑるやいなや蝶の来る

山腹にタムシバの白見えてをり

川土手の枝を下げたる桜かな

巣作りの燕を見上げバスを待つ

盛り過ぎ小手毬の枝剪定す

川に沿ふ小道の先に麦青む

玄関に朝日の差して夏近し

すみれ

すぐそこに島見えてゐる春時雨

橋渡り海へと歩く日永かな

つなぐ手に落花一片留まりて

せせらぎの石に分かるる花筏

枇杷植ゑて崖下の海見てゐたる

山つゞし峠を越えて続きをり

それぞれの耳に届いて遠蛙

藤棚を背筋を伸ばし歩きたる

遠足の列に遅れて土手歩く

大樟の影を歩いて夏近し

知佳子

境内の夜店の中へ桜散る

山吹やもうすぐ母の家に着く

母が家の石垣に咲き芝桜

友誘ひ筍掘りに出掛けたる

母はまづ筍飯に箸おろす

母が家で筍茹でて持ち帰る

水車小屋通つて奥の溝浚ふ

裏山の奥へ奥へと溝浚ふ

溝浚へすみて山水溢れ出る

二日かけ枇杷に袋を掛け終る

ちどり

江田島を烟らせてゐる春の雨

薔薇芽吹く赤々として薔薇芽吹く

町名はローマ字併記春日傘

跳ね橋のぐんと上がりて春の海

一片の雲もなき空春深し

菖蒲田を舞ひゆく蝶を見つめたる

払うても蜘蛛の囀すぐに囀を移し

ひねもすを黙して岩魚釣りにけり

夏草の茂れるままに売却地

白服の人の電車へ滑り込み

友岡崇山子

春の夜の鍵開けていく靴の音

勾配の橋あつけなく春の星

待ち合わせ後ろ姿の花見人

八重桜かんざしにして京都の子

しやがみこむ園児の疑問花萼

春昼に新しき濃いアスファルト

春の暮インクの切れたプリンター

雲よりも薄い魂ヒヤシンス

ビル街の隙に春光新幹線

解体の駅の鉄骨春の果て

ふじ女

侘助といふ名とその花が好きで

山々の四方に見えて彼岸道

その角を曲る人影春の月

イーゼルを雀隠れの野に組んで

信樂の壺に桜の咲き満ちて

佇めば花のひとつひら肩に落つ

傘立てに父の杖あり花海棠

朧夜の路地より人の出てきたる

柳絮飛ぶ石橋渡り終へたれば

妹との日々思ひ出す暮の春

松田裕子

雪止んで瀬戸内海に日の差せる

山里に雉の声して日の昇る

路の藎さがす傍には獣道

紅梅の家へと坂を上がりゆく

盆梅を手入れの父に朝日差す

瀬戸の海波立つてゐる春の朝

春休み海辺に自転車並び

花の下乳母車の子眠りをり

外灯に照らされてゐる桜かな

海風に花のひとつひら吹かれゆく

美耶

背戸山に日の戻りくる春時雨

春炬燵宅配便はまだ来ぬか

日時計の影の薄さよ春愁

足を止め振り返りたる初音かな

雨あとの春光のなかロープウェイ

嬰兒と夫と揃ひの春帽子

再会のふらこ揺らし話したる

真つ暗な川面に落つる花篝

春なかば庭の野鳥を見てゐたる

満ち潮に子を呼び戻す大千潟

森口良樹

積む雪に用ざされてあり山の寺

長靴を借りて雪道歩きたる

寺町の空の明るき入り彼岸

こてまりや御堂に仏旗揚げてあり

半月のしだれ桜の上に見ゆ

いくたびも揃うて散らす花の屑

花屑を髪にとどめて友の来る

顔見知りゐるかと歩く苗木市

目龍いつばい屈櫓の芽摘みにけり

桑門わかこ

燕来る隣の家は子が三人

子の電話思ひ出しては蓬摘む

桐咲いて日輪はいま雲の中

ぼうたんに優しき声の届きたる

我が姓と同じ名を持つ牡丹かな

母の日の母の仏前に集まりぬ

柏餅食べて大きな景と思ふ

花蜜柑匂ふ海辺を通り過ぐ

茄子二本トマト二つの我が畑

白神陽子

前山の雨雲晴れて初蝶来

三極の咲く峽に聞く鶯の笛

連なりて名もなき山や花辛夷

菜の花の川土手に置く乳母車

正座して履歴書かく子春の星

お祓ひの岩田帯締む桜月

露天湯の生垣長し初蛙

食卓に播鉢で置く木の芽和え

春休み皿に溢るるカレールー

山野ウタ

鳩放つやうに木蓮咲きるたり

見上げんと枝垂桜に顔向ける

目白らが啄むたびに花の舞ふ

春天を飛行機雲が分かちたる

落椿生けたるごとく道にあり

菜の花や今年も同じ畝に咲き

咲くときも散るときもよし木瓜の花

親友に子が生まれたり春の風

綾乃

春の朝飛行機雲の二つ三つ

春霞音高く飛ぶ米軍機

職を辞す朝の背中に春の風

同僚の去る日の庭の桜かな

花吹雪勤め帰りの土手の道

渋滞の先に見つけし芝桜

山かげに金襴咲けば郷思ふ

露の香に包まれてをり昼下が

大畑恵

客を待つ窓を開けば春の色

朝まだき花見仕度の米を研ぐ

車椅子押して見上げる大桜

降る花をとほり初出勤の道

堀に沿ひ咲き満ちてをり桜草

早朝に掃き集めたる紅椿

石段の蒲公英の絮しやがみ見る

山の中鶯のみの聞こえたる

宮田保江

独り居に月下美人の咲きにけり

じやぶじやぶと洗うてゐたる夏野菜

牛蒡咲く上を雀の飛びゆけり

讃岐路の池に映りて桐の花

蛇の目草幼き頃の唄うたひ

仙人掌の太平洋の前に咲く

阿姫

山吹のこぼれ座敷は静かなり

リラの花濃く匂ひくる車中かな

朝顔の種蒔いてゐる楽しさよ

緋牡丹の咲いて寺苑の午後静か

小判草揺れ山門に客を待つ

紀英子

花馬酔木父の遺せし句帳あり

ユーミンを聞きつつ花の便り出す

母眠る岬の寺に花惜しむ

湯水の看板見えて花うつぎ

遠藤さつき

街道の白詰草の匂ひけり

ムスカリの鉢の周りで立ち話

欄干に雀の子らが餌を待つ

上島康子

花の雲見上ぐる光の天守閣

本丸の跡に咲きたる梨の花

登山口あたりに見ゆる桜かな

熊谷ゆり子

初蝶に従ひ歩く城の濠

石垣に刻印しかと花吹雪

送られて来し筈に鍬の跡

高嶋朔代

花は咲き小鳥も来たる畑かな

山々の若菜の色の濃くなりて

かこ

柔桜の風を受けては翻る

公園の樟も櫟も若菜なり

民

大部屋のカーテン越しに咳の音

手術後の春の青空見上げたる

ちかこ

紫陽花の葉陰の蕾一センチ

短夜や新聞配るバイクの音

津田玲子

石垣の隙間にあまた花の塵

藁屑の夕には増えて雀の巣

撫子

ランドセル背負うて通る花の下

鈍行に花を見てゆく旅路かな

穂高

鶯の鳴き交す道歩きたる

鳥の声聞きつつ朝寝してをりぬ

幹

雨止みて花の盛りを見てをりぬ

一陣の風に押されて花筏

みさ子

海側の座席にすわり花の昼

車庫に沿ひ藤房あまた垂れてをり

やす保

くり返し根につまづく子草団子

景桜の川岸に食むカレーパン

山崎桂子